Chapter 10: **クローゼット大混乱とトロール作戦**

その夜、シャワーズの氷と葉に包まれた庭園の家には、月光が差し込んでいた。ツタと氷柱が織りなす静寂の楽園――までは良かった。

チャイムが鳴るまでは。

ドアの外に立っていたのは、今もなお幻想的な美しさを纏うゾロアーク。したたかな笑みを浮かべ、背中にはサッチェルバッグ。

「久しぶりじゃん？」と、ゾロアークがニヤリ。

「ゾロ！」とリーフィアが笑顔で迎える。「まだ影に隠れて他人のメンタル壊してるのか？」

グレイシアも加わる。「あんた、死んだか、有名人になったかと思ってたよ」

ゾロアークはウインクしながら中に入る。

「ちょっと良くなっただけさ。ふたりがこの……冷凍庭園で落ち着いたって聞いてさ」

三人は笑い合い、懐かしの思い出話に花が咲く。子ども時代の悪ふざけ、暗躍いたずら戦争、そしてゾロアークが三日間ウソッキーになりきってたあの事件――。

だがその時、ゾロアークがピタリと動きを止めた。

ソファに座り、オレンジュースをすすっていたシャワーズの存在に気づいたのだ。

「……子どもがいるの!?」とゾロアークが目を見開く。「マジかよ、そんなにあたし留守にしてた？」

「厳密にはね」と、グレイシアが答える。「あたしの娘なの」

「……娘？……嘘でしょ、現実味なさすぎでしょこれ」

動揺しながら、ゾロアークはリビングにあった大きなロッカーの扉を何気なく開けた。

――最悪の選択だった。

扉が少し開いた瞬間、草の切れ端、溶けかけの氷、そしてやたらと綺麗なパッケージの山がドサドサと崩れ落ちた。

「ちょ、なにこれ、」とシャワーズが呟く。

『ポーキーマン：森の狂騒』  
『ポーキーマン：氷のラブエディション』  
『ポーキーマン：グレイズド・アンド・コンフューズド』

シャワーズとゾロアークは、言葉を失ってその場に凍りついた。

箱。フィギュア。ぬいぐるみ。  
光沢のある雑誌にはこう書かれていた――『ツタージャの秘密』。

「……ちょっと、ママ！？パパ！？なにこれ！？」と、シャワーズが絶叫。

リーフィアはおやつをかじりながら振り返り、

「違う！僕たちのじゃない！」

グレイシアもキレ気味に叫ぶ。

「あたしら、豚すら好きじゃないし！ビーガンなんだけど！？」

その時、庭の棚の裏から、不気味な笑い声が響いた。

イシツブテのようにニヤついたヤミラミが、影の中からスルリと現れた。

「三日もゴーストに留守番させたらこうなるっての。ロッカープラン、王道いたずら。台所のパントリーも楽しみにしとけよ？」

ゾロアークは顔を手で覆った。

「まだグレムリン系トロールやってんのかよ、あんた……」

シャワーズは頭を抱える。

「……学校で一生いじられるんだけど……」

ゾロアークはシャワーズを軽く抱き寄せる。

「いいって。あんた今、A級ヤミラミスペシャルに喰らっただけ。みんな一度は通る道よ」

ヤミラミはポーキーマンのぬいぐるみをポイッと投げつけた。

「やれやれ、みんな丸くなっちゃってさあ～」

そこへ、ブースターとサンダースが窓からこっそり覗き込む。

シャワーズがハイドロポンプでヤミラミを追い回す光景を目撃してしまった。

ブースターが小声で聞く。

「なあ……本当に豚系は好みじゃなかったのか？」

サンダースはボソッと呟いた。

「もう全員、初期化しねぇと無理だろこれ……」